【資料2】「神戸市消防基本計画」（素案）に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年１月17日
【提出意見数】 33件（６通）

	NO.	総計	意　見（概要）	市の考え方
計画全般	1	1	計画全体の記述について、用語集があるので助かるが、市民が読んでも分かりやすいようもう少し書きぶりについて工夫できないか。	ご指摘のとおり、消防に関する専門的な言葉をできる限り使用することなく、また長い文章を短くするなど、市民の方々に読みやすく、かつ、わかりやすいように心がけつつ、計画全体の文章表現等を修正いたします。
	2	2	「市民」もこの計画の主語になっているが、市民はこの計画を知らないのでは。	消防基本計画策定後には、消防団や防災福祉コミュニティなど、地域防災の中心的役割を担っていただく団体に計画冊子を配布するとともに、消防局ＨＰでも公開し広く周知する予定です。 また、消防に関する専門的な言葉をできる限り使用することなく、また長い文章を短くするなど、市民の方々に読みやすく、かつ、わかりやすいように心がけつつ、計画全体の文章表現等を修正いたします。
		3	計画の中の、子ども達の絵がいいですね。もっと写真とか絵を増やされて、この消防基本計画が市民にとって、もっともっと身近な存在になればいいと思います。	
	3	4	今の「神戸2010消防基本計画」と次の「消防基本計画」を見比べても特に大きな違いは無いように見えるが、前の計画と違う部分はどのあたりか。	次期消防基本計画は、2025年に向けたこれからの社会の潮流（人口減少、超高齢化、災害様態の多様化など）の中で、どのように市民の生命・身体・財産を守っていくかを検討し計画に反映しております。また「plus“こども”の視点」と「plus“おもてなし”の視点」を計画に加えるなど、15年後の安全で安心な神戸の将来像実現に向けた、新たな取組みについても計画しております。（※１） 2010年までの5年間の取組みと次期消防基本計画の関係など、詳細につきましては、「神戸消防アクションプラン2015」の参考部分をご参照ください。（※２） いずれも、今後継続して取組むべきものについては、引き続き計画に位置付けております。 ※１　AP：４、５ページ ※２　AP：28～30ページ
	4	5	24時間365日何かあれば119通報で駆けつけてきてくれるということが消防の基本であると思う。昨今の不況で財政の悪化をよく耳にするが、消防車や救急車など減らすことをせず、基本を大切に市民生活を守ってほしい。	神戸市消防局では現在の「神戸2010消防基本計画」において、阪神・淡路大震災の教訓である「自助・共助・公助」により取組みを実施してきました。地震など大規模な災害に備えて、市民の皆様には「自分のことは自分で守る」「地域のことは地域で守る」ことをしていただき、消防は、多様化する災害に対応するため、指揮隊、特別高度救助隊や特殊災害隊の整備などを進めてまいりました。 今後とも、市民や事業所などとの協働と参画の取組みを進めると共に、消防部隊の効果的かつ効率的な運用を図り、市民の安全・安心を守っていきます。

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。

【資料2】「神戸市消防基本計画」（素案）に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年1月17日
【提出意見数】 33件（6通）

	NO.	総計	意　見（概要）	市の考え方
	5	6	価値観が多様化し、また経済不況の中、正直「防災」に興味を持って生活することは難しい。「自分のことを自分で守る」のはその通りなので、誰がどれくらい地域のために取組むべきなのか、もう少し目的と役割をはっきりさせると「防災」に取組みやすくなるのではないか。	ご指摘のとおり、行政（消防局）、地域団体（防災福祉コミュニティ・消防団・事業者・大学等）及び市民が担っていくべき防災に関する役割分担等について、それぞれ整理したうえで、「神戸消防アクションプラン2015」第２章中で明らかにします。（※１） また、「基本理念」や「基本方針」の中で、そのような取組みの重要性についても触れています。（※２） ※１　AP：21ページ ※２　GD：21～26ページ
		7	「具体的施策」「具体的事業」と書かれているが、具体的に自分たちや消防局がどのように防災と関わっていくのかよく分からない。もっと具体的に書いて欲しい。	
		8	「共助」についての取り組みは理解できるが、もう少し「自助」的な取り組みを計画に盛り込む必要があるのではないか。いざという時には、まず自分の命は自分で守ることが重要。	
神戸らしさにプラスの視点	6	9	子どもの視点を消防の計画に入れるのは、新しいことで賛成ですが、老人の視点で計画を作ることも大切ではないか。	社会潮流でも触れているとおり、これからの人口減少・超高齢化社会が及ぼす影響は看過できないものであり、高齢者の安全・安心については、今後15年間における大きな課題の一つと捉えています。そのため、高齢者の視点については項目のひとつとするのではなく、すべての施策を通じて取組みを進めていきたいと考えております。 また、「神戸らしさにプラスの視点」の「プラスおもてなしの視点」は、震災から16年が経過して風化が懸念される地域での「助け合い」や「支え合い」の大切さという震災の教訓を、再度、原点に立ち返り「防災でのおもてなし」と捉えて発信することで、これからの高齢化社会など、まちの安全・安心や活性化に繋げていきたいと考えています。
		10	社会潮流にも記載があったが、これからの超高齢化社会の到来に対応するためには、「プラス“高齢者の視点”」として、重点的に取組んでいく必要があるのではないか。	
		11	plus“こども”や“おもてなし”についての具体的事業が挙げられているが、潮流等で取り上げられている高齢者の問題については、どのような対策（事業）をするのか。また、それらを一括りにしてplus“高齢者”としてはどうか。	
		12	防災に「おもてなし」という視点を入れるとのことですが、私にはしっくりきません。詳しくご説明いただきたいと思います。	

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。

【資料2】「神戸市消防基本計画」（素案）に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年1月17日
【提出意見数】 33件（6通）

	NO.	総計	意　見（概要）	市の考え方
重点施策・具体的事業	7	13	地域で高齢者が増えているのが高齢化であり、時代の流れもあって、昔のように若い世代が地域で力を発揮することが少なくなってきている。「地域で助け合う」というが、行政の役割こそ大事だと思う。	ご指摘のとおり、これからの人口減少・超高齢化社会では、「助けられる側」に比べて「助ける側」の割合が減っていくため、行政の役割に加えて「自助」「共助」の役割が大切になってきます。阪神・淡路大震災の教訓として、特に大規模な災害においては消防だけでは対応できない状況になることも考えられ、日頃からの地域での助け合いや支え合いといったものが重要となっています。次期消防基本計画の中では「地域のゆるやかな連携」の「(1)－①防災福祉コミュニティの活性化と地域組織間の連携支援」として位置付け（※１）、行政の役割については、2025年に向けたすべての将来像実現に向けたあらゆる施策・事業を通じて実施してまいります。 ※１　AP：６ページ
	8	14	魅力ある消防団組織づくりの一つとして、消防団への水槽付ポンプ車の配備を検討するべきだと思います。	現在消防団へ配置している小型動力ポンプ（積載車）は、消火栓、池、河川や海などあらゆる水量豊富な水利を活用することができ、林野火災の中継放水や水利の希薄な地域での火災時における長距離ホース延長による火災防御の際には、特に力を発揮する資機材です。 ご指摘の水槽付ポンプ車については、積載車より大型なため、新たな車庫の整備や中型運転免許の取得など、財政的な課題もあることから、現在配置している小型動力ポンプを積載する積載車の導入・更新により対応していきたいと考えています。
	9	15	「防災教育」は重要。消防と学校が協力しながら取組んでいかなければならない。特に、学校教育の中できちんと位置づけて防災教育を実施すべきではないか。	将来像２「防災への心を育むまち」」の「（4）-②子ども達への防災教育支援」において（※１）、地域と学校の連携による防災教育の実施促進や、子供たちに『震災の教訓』と“いのちの大切さ”を伝えるための防災教育として、市内の小・中学校等で『❤いのちのコンサート』を開催するなど、次世代の防災の担い手を育んでいきます。 ※１　AP：９ページ
		16	地域の防災訓練に参加したが、私を含め高齢の方がほとんどだったように思う。これからのことを思うと、もっともっと若い人に参加してもらえるような夢のある将来像を描いてもらいたい。	

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。

【資料2】「神戸市消防基本計画」（素案）に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年1月17日
【提出意見数】 33件（6通）

	NO.	総計	意　見（概要）	市の考え方
重点施策・具体的事業	10	17	阪神・淡路大震災から16年が経過するが、震災を経験した人はそのことを忘れないし、経験していない人は震災を実感しにくいのは仕方がないと思う。何よりもこれから大きな地震に備えることができるよう、子ども達に教えていくことが大切である。	震災から16年が経過し、神戸市民の約３分の１は震災後に市外から転入、あるいは震災後に生まれた方々と言われています。 そのため次期消防基本計画では、阪神・淡路大震災の教訓を風化させることなく自助・共助・公助での取組みを継承し、防災福祉コミュニティを始めとしたこれまでの取組み（＝「神戸らしさ」）に、新たな視点を加え、充実・強化するとともに、災害に対して備える“人財づくり”に繋げていくため、「神戸らしさにプラスの視点」を設定しました。（※１） うち「プラスこどもの視点」は、①子ども自身の安全を図る、②命の大切さを育むと共に、防災に関心を持ち、将来大きくなったときに地域での防災活動に参加するよう支援していく、2つの側面を持って取組みを進めていくものです。（※２） 具体的には、将来像２「防災への心を育むまち」」の「（4）-②子ども達への防災教育支援」において、次世代の防災の担い手を育んでいくとともに、「(4)-③防災福祉コミュニティ等の国内外への発信」において震災の教訓を発信していきたいと考えています。（※３） ※１　GD：19、28、29ページ ※２　AP：４ページ ※３　AP：９ページ
		18	神戸は震災を経験し、その教訓は重要だと思う。震災から16年が経過した今、周りには震災の経験がない人も増え、震災の記憶は風化されつつあると感じている。消防局として、30年後の「震災の教訓」はどのような形になっているのが理想と考えているか。	
	11	19	私の住んでいる地域では、防災訓練がいつ、どこで行われていのるかよく分かりません。もっと広報に力を入れてもらいたいです。	防災訓練につきましては、月ごとに各区での訓練開催情報を神戸市ＨＰに掲載しておりますので、ご参照ください。 また、広報体制の強化として、将来像２「防災への心を育むまち」の重点施策(5)「防災情報の発信」において、「広報の充実・強化」を具体的事業として盛り込んでいます。（※１） ※１　AP：10ページ
		20	防災訓練に人が参加しないのは、防災への意識が低いことが原因ではなく、それがどこで行われているのかが分からないからだと思う。例えば、出初式は毎年正月に同じ場所で行われるため、気軽に見に行きやすい。日頃の防災訓練も同じ場所でテーマを変えて定期的に開催するなど工夫し、またそれを継続的に広報すれば、自然と防災に親しみやすくなってくると思う。	
	12	21	以前、ＢＯＫＯＭＩスクールガイドを読みました。デザイン的にも優れ、震災を経験した神戸だからこそできた冊子ではないでしょうか。今後とも、なにか継続した取り組みを、神戸市としてできないものでしょうか？	現在「デザイン都市・神戸」を推進していく中で、旧神戸生糸検査所を改装し「（仮称）デザイン・クリエイティブセンターKOBE」としてデザインの発信基地としてさまざまな取組みを実施しようと計画されています。今後、この中で、デザインと防災が融合した取組み（防災セミナーや各種防災イベントの開催等）が実施できないか、関係機関と調整中です。

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。

【資料2】「神戸市消防基本計画」（素案）に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年1月17日
【提出意見数】 33件（6通）

	NO.	総計	意　見（概要）	市の考え方
重点施策・具体的事業	13	22	○実火災訓練施設の整備 以前テレビ番組の中で紹介されていた、大阪市消防局の消防学校で行われている方法を導入すれば良いのではないかと考えております。 大阪市の消防学校では、使わなくなった（コンテナ船で運ぶような）コンテナを業者から譲り受け、その中で実際に木材を燃やし、火災の熱の凄まじさを体感し、消火すると言う訓練が行われている様です。これであれば新たに訓練施設を建てるスペースも要らず、コンテナを置くだけで済むと思います。	神戸市では、市民防災総合センター（北区）内に「都市災害対応訓練施設」が平成24年春に完成予定となっています。ここでは、店舗や倉庫などを模したさまざまなレイアウトで、消防職員消防団員への訓練はもちろんのこと、市民や事業所、子ども達等への防災訓練の場としても活用を予定しています。また、熱や煙が体験できる「耐熱耐煙室」の改修も進めており、今後はより実践的でリアルな訓練を実施することができると考えます。（※１） ※１　AP：９ページ
	14	23	現在西区で実施中の救急ステーション方式を、北区淡河町でも実施してはどうでしょうか。３名体制の救急隊を新設し、淡河町中山や東畑あたりに救急ステーションを設置出来れば、淡河地域の救急体制は大きく変わるのではないでしょうか。そしてそこに配置する車両を、消火も救急も可能ないわゆる「消救車」にする事が出来れば、火災事案にも対応する事が出来ると考えています。さらにその救急ステーションを消防団詰め所と一体化し、淡河消防団との密な連携が取れるようにすれば良いのではないかと思います。	消防署所の配置や消防車両数などは、地域の人口などを勘案しその配置数などを定めており、ご指摘の淡河地域での消防署所数、救急車数は、今現在充足しているものと考えております。 地域の救急体制につきましては、ヘリコプターの積極的な活用や、重篤な救急事案へのポンプ隊の同時出動、まちかど救急ステーションの整備、救急救命士による高度な救急処置の実施などで対応していきます。また、平成24年に完成する新管制システムの整備により、救急車の現在置を常時把握することで災害等発生現場から最も近い車両を出動させるなど、駆け付け時間の短縮を図っていきたいと考えております。
	15	24	現在の状況では、救急車が足りていないように思います。どうやって救急車などを増やしていくのかなど、具体的に計画の中で明記していくことが必要ではないでしょうか。	救急需要の増大は、今後15年における大きな課題と捉えており、将来像３「命を大切に考え取組むまち」に重点施策(9)「適正な救急車の配置と救急需要対策」を盛り込んでおります。（※１）今後、救急需要をとりまく様々な状況の変化を的確に捉えつつ、救急隊増隊の検討を含めて総合的に推進していきます。 また、消防法第2条第9項に規定する救急業務については、消防組織法第8条により「消防に要する費用は、当該市町村が負担しなければならない」とされています。 さらに、救急の有料化については、消防庁の見解でも国民的な議論の下で、様々な課題について検討しなければならないとされていることから、今後国や救急需要の動向等を踏まえつつ、将来的な課題と考えています。 ※１　AP：14ページ
		25	救急需要の増大に対応していくには、救急車を増やしたり、適正利用を広報したりするだけでは追いつかない。救急車の有料化を進めていく必要があるのではないか。	

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。

【資料2】「神戸市消防基本計画」(素案)に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年1月17日
【提出意見数】 33件(6通)

	NO.	総計	意　見(概要)	市の考え方
重点施策・具体的事業	16	26	阪神・淡路大震災では、水が出なくて、火が消せなかったのではないですか。震災を経験した神戸市の消防局として、消火用水を充実させていくことを計画に入れるべきではないですか。	震災後、消防局では「消防水利の充実」を消防基本計画等の中で打ち出し、耐震性防火水槽を258基設置したり、プールや河川の利用など様々な種類の消防水利の確保に努めてきました。その結果、神戸市内の消防水利の状況は、震災前と比較して相当強化されたと考えています。今後は、将来像４「消防サービスが行き届くまち」の中において、経常的な事業として引き続き取組んでいこうと考えております。
	17	27	現在水上消防署に配置されている特別高度救助隊・本部特殊災害隊を本土の署所（高速道路の入り口が近く、免震構造である署）へ配置換えすることを提案致します。そうすることにより、今までの様に一度ポーアイから本土へ出る時間が短縮でき、大地震の際の消防力も確保する事が出来るのではないでしょうか。 BLUE-CAT に関しても、やはり“大規模災害対応救急隊”である以上は、本土へと移動させる事が望ましいと思います。	特殊災害隊など、ご指摘の部隊につきましては、特殊災害や大規模災害等で連携した部隊活動を行うため、人・物・情報の交流拠点であるポートアイランド、神戸港及び神戸空港を管轄とする水上消防署に集中的に配置し、災害対応や合同訓練、合同研修などを実施しているところです。 消防部隊の配置については、将来像４「消防サービスが行き届くまち」の重点施策(12)「組織・体制づくり」において、今後の社会情勢の変化などに柔軟に対応できる組織・体制づくりを図っていき、災害様態や地域特性に応じた部隊の配置を検討していきたいと考えています。（※１） ※１　AP：17ページ
	18	28	○専任救助隊の常時５名乗車、及び特別高度救助隊の常時６名乗車の確立 現在、専任救助隊は５名編成であるにも関わらず、実際にはほとんど４人編成であると言うのは、疑問に思うと共にとても心配になる点です。さらに救助隊の頂点である特別高度救助隊も、本来６人編成のはずが実質５人編成になっています。震災を経験し、瓦礫の下の医療にも力を入れ始め、さらには兵庫県下の救助隊の指導をも務める神戸市消防局の救助隊が、この様な状況であるのはいかがなものでしょうか。	神戸市では、ご指摘のとおり専任救助隊は4名、特別高度救助隊は5名の乗組みとなっていますが、人命救助に関する専門的かつ高度な教育を受けた隊員それぞれ5名、6名の隊員を配置しているところです。 また神戸市では、救助隊と特殊車両隊が連携した現場活動を実施することで、現場安全管理や救助指揮等において効果的かつ効率的な運用を図っているところです。 「神戸消防アクションプラン2015」の重点施策(12)「組織・体制づくり」において、「救助部隊の編成と効果的運用」の検討を行い、将来的な部隊運用のあり方や、効果的な部隊配置について計画の中で議論を進めてまいります。（※１） ※１　AP：17ページ

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。

【資料2】「神戸市消防基本計画」（素案）に対するパブリック・コメントの結果について
【意見募集期間】平成22年12月13日～平成23年1月17日
【提出意見数】 33件（6通）

	NO.	総計	意　見（概要）	市の考え方
重点施策・具体的事業	19	29	将来像５「あらゆる災害に備えるまち」の中で、救助隊だけでなく、テロや化学災害に専門で対応する隊も強化・充実させていく必要はないか。また、目指す姿に「(14)現場の安全性確保のため、複雑多様化する建築物での必要な防災対策が進められている。」とあるが、消防隊そのものが今よりも充実していることも大切である。	将来像５「あらゆる災害に備えるまち」」の「（14）-②救助隊の災害対応力の充実・強化」を特殊災害隊を含めた事業名として「消防部隊の災害対応力の充実・強化」へ修正いたします。また、それにあわせて、目指す姿を「災害の多様化に伴い、現場の安全確保、及び効果的な消防戦術や部隊運用がなされている。」へ修正します。（※１） ※１　AP：19ページ
評価・検証	20	30	「神戸消防アクションプラン2015」に将来像ごとに代表的な指標を設けると書かれているが、素案には示されていない。そのため、将来の神戸市（または、消防局）がどのような状態になっているのかが不鮮明な印象を受ける。将来像には、具体的な状況がわかるデータが必要ではないか。	ご指摘のとおり、各将来像に３つの指標、合計　15の指標を追加いたします。（※１） この指標は、安全・安心に関する社会潮流などを考慮し、消防局の取組みによる効果や、将来像がどんな状況にあるのかを把握できるようなもので、「神戸消防アクションプラン2015」第2章において設定しています。今後は進行管理を行うなど、PDCAサイクルにより計画的に将来像実現に向け、取り組んでまいります。 ※１　AP：22～25ページ
		31	「神戸消防アクションプラン2015」は「神戸消防グランドデザイン2025」より具体的に感じるが、いまひとつイメージがしにくい。各取組みに数字を設定してはどうか。	
	21	32	計画に具体性がないように感じる。	次期消防基本計画について、「神戸消防グランドデザイン2025」では、主に15年後の神戸の安全・安心に関する将来像を描き、それを実現するための重点施策及び具体的事業等を「神戸消防アクションプラン2015」で計画するという構成になっています。今後は、毎年度「年度消防局重点施策」を策定し、より具体的な取組み内容を市民の皆様にお示ししていく予定です。 また、「神戸消防アクションプラン2015」の取組みについては、具体的事業の進捗状況の確認、及び重点施策の検証を行います。（※１）併せて、各将来像における成果や新たな課題など評価を行うことで、「神戸消防グランドデザイン2025」の実現に向け着実に取組みを進めてまいります。 ※１　AP：26、27ページ
		33	「神戸消防グランドデザイン2025」の「まちの将来像」には沢山の理想像が描かれている。どの程度実現できると思っているのか。	

※掲載ページを示す場合には、「神戸消防グランドデザイン2025」をGD、「神戸消防アクションプラン2015」をAPと記載しています。